

グリム昔話論 [2]

－昔話における糸紡ぎモチーフ－

大 崎 隆 彦

1. はじめに

グリム兄弟の『子どもと家庭の昔話集』(以下『グリム童話集』と略す)¹⁾には様々な仕事や職業がモチーフとして登場するが、なかでも〈糸紡ぎ〉を何らかの形で扱った話が15余りある。これは数からいっても他のモチーフに比べてかなり多いのだが、これらの糸紡ぎ話にはいくつかの共通した特徴が見られる。まず第一に糸紡ぎ話の主人公はすべて女である。次に、第一の特徴と関連するが、これらの話において〈糸紡ぎ〉が職業として紹介されることは決してない。つまり例えば、「昔々あるところに一人の仕立屋がおりました」という書き出しで始まる話はあるが、「昔々あるところに糸紡ぎがおりました」という文句は一度も出てこない。それは、18～19世紀頃の昔話の語り手たちにとって、糸紡ぎは女なら誰もがする仕事で、例えば家事をすべて片づけた後の夜なべ仕事として糸を紡いだのであり、彼女たちの仕事はいわゆる「職業」ではなかったからである。さらにもう一つ共通するのは、こうした糸紡ぎ話の類話がヨーロッパのほぼ全域からアジアにかけての極めて広範囲に存在する点である。

おそらく有史以前の太古の昔から近代初頭に紡績機械が発明されるまで、ヨーロッパの糸紡ぎはもっぱら女の仕事であった。この分野の技術は女によって考案され改良されてきた。ギリシア神話において錘は宇宙の象徴であり女の生産力の象徴でもあった。²⁾ またベルヒタ、ベルヒタ、ベルタなどと呼ばれる糸紡ぎの守護女神がいて民話に登場し、勤勉な紡ぎ手の女に幸福を授けたり、逆に糸紡ぎをさぼったりうまく仕上げることができない娘にひどい罰を与えたりする話が数多くある。南ドイツ・キムゼーの山岳地域に次のような話が伝わっている。「娘たちが新年を迎える前の晩に糸を紡いできれいに糸巻き棒に巻き終えていないと、母親がやってきて言うのだった。『いいかい、ベルヒタおばさんがやって来て、おまえのお腹を切り開いて、カール用のクリップをお腹いっぱい詰めておくれ』³⁾ このように歴史的に見ても糸紡ぎと女性は切っても切れない間柄なのだが、もう一つ興味深いことがある。17～18世紀頃になると、後述するよう

に、亜麻布産業の振興者たちによって、紡ぎ仕事の仲間集団として「紡ぎ寄合」“Spinnstube”が形成され、女たちは自分の家を出てそこで集団で仕事をするようになった。実は『グリム童話集』などに収められた糸紡ぎ話の原話や、彼らが採集した類話のほとんどが、元をただせばこのような農村の女たちの糸紡ぎ仕事の現場で作られ語り継がれてきたものなのである。

女が糸紡ぎ仕事の担い手であると同時に昔話の作り手・語り手でもあるというのは一体なぜか。そこにはいかなる背景と必然性が横たわっているのだろうか。グリム兄弟はこうした糸紡ぎ話を数多く自分たちの『童話集』に採用するに当たって、例のごとく彼ら特有の変更と脚色をほどこしたが、そこにはどのような動機と問題意識が介在したのか。本稿では、『グリム童話集』の中の糸紡ぎ話の起源と類型を考察し、それらの話の筋書きに内在するある種の「矛盾」あるいは「背反」について言及し、さらに KHM55『ルンベルシュティルツヒェン』“Rumpelstilzchen”を取り上げ、そこに顕著に見られる「矛盾・背反」を、近代初期のヨーロッパ特にドイツにおける亜麻布産業をめぐる歴史・社会的コンテクストを検証することによって解明するのがねらいである。また最後に、糸紡ぎという行為の象徴性に込められた女の生産力、そしてその衰退と昔話の口承伝統の衰退との関係を明らかにしたい。

2. 『グリム童話集』における糸紡ぎ話の類型とメッセージ

『グリム童話集』にはありとあらゆるタイプの糸紡ぎ話が収録されているが、それらの話からは大きく分けると二つのメッセージが伝わってくる。一つは大昔から女の仕事とされてきた糸紡ぎに対する不満を伝えるもの、もう一つは糸紡ぎを価値ある立派な仕事として認め讃えるものである。ただし往々にして、弟のヴィルヘルム・グリムが『童話集』の初版以降の実質上の編集者として原話に何回も変更の手を加えたため、1810年の手書き初稿〈エーレンベルク手稿〉と、1812/15年の初版、さらにそれ以降の版とでは、筋の展開と動機づけにおいて重要な違いがある。ここで主としてルース・ボティックハイマーの研究を足掛かりに⁴⁾、糸紡ぎ話の筋・構成・モチーフの点から次の四つのグループに分類し、その類型を分析してゆきたい。

- (1) 糸紡ぎそのものが話の主題になっているもの。
- (2) 糸紡ぎが女主人公の性格や特徴を計るものさしの役割をするもの。
- (3) 糸紡ぎという行為が主に話の筋を押し進める働きをするもの。
- (4) 糸紡ぎが女を、あるいは女の辛い仕事を象徴するもの。

(1) のグループではほとんどの場合、女主人公が糸紡ぎを嫌がっているのがわかる。彼女たち

は策略や嘘や超自然の力を借りてその仕事からなんとかして逃れようとする。

KHM14『糸を紡ぐ三人の女』“Die drei Spinnerinnen”はこのタイプの典型的な話の一つで、西はアイルランドから東はギリシアまで分布している物語伝承のドイツ語版である。グリム兄弟はこの原話をカッセルのジャネット・ハッセンプフルークの口承から採集し、初版では『苦しみの亜麻紡ぎ』“Von dem bösen Flachsspinnen”というタイトルで収録したが、第二版以降はパウ・ヴィーガントから送られた話に差し替えてこのタイトルに変更した。⁵⁾ 怠け者の娘になんとか糸紡ぎをさせようとする母親が、ある王の妃に、娘が糸を紡ぎたいのに亜麻が足りないと嘘をついたばかりに、娘は城の亜麻をすべて紡がせられることになり途方に暮れていると、三人の魔法を使う老婆がやって来て助けてくれ、彼女は王子と結婚でき糸紡ぎからも逃れることができた、という話である。この話は、怠け者の娘に手を焼く母親、息子に働き者の嫁を迎えようとする妃、糸紡ぎを嫌う娘、その娘を助ける三人の女魔法使いというふうに、すべては女性の登場人物によって展開される。そこから伝わってくるのは糸紡ぎという辛い仕事に対する嫌悪感である。初版にはなかった娘と王子の結婚というハッピーエンドは、19世紀前半当時のブルジョアジーの読者を念頭に置いたヴィルヘルムの改作手法の典型でもある。

KHM128『怠け者の糸紡ぎ女』“Die faule Spinnerin”に登場するのはただの平凡な夫婦である。貧乏で妻も暮らしを助けるために糸を紡がなければならないのに本人は一向に仕事をする気がない。糸巻きの枠がないから糸を巻き取ることができないと妻が言うので、夫は糸巻きの枠にする木を切りに森へ行く。ところが妻は先回りして木に登って葉かげに隠れ、下の夫に向かって「糸巻き枠の木を切る者は死ぬぞ、糸巻き枠に糸を巻く者はくたばるぞ」と怒鳴る。その後も妻は策略をこらして結局夫に自分の仕事をあきらめさせる。初版と第二版では、ヴィルヘルム・グリムはこの話にはほとんど手を加えなかったので、最後は「そこで亭主はすっかり黙りこんでしまい、しくじった、おれのせいだ、と思いました。そしてそれからはずっと、糸紡ぎや糸巻きのことはおかみさんの好きなようにさせました」⁶⁾ というふうに穏やかに終わっていた。ところが第三版以降、彼はこの結末がどうしても物足りないと考えたのか、次のような厳しい価値判断の文言を追加して話を締めくくる。「でもこれは嫌な女だと、あなたなら言うにちがいません。」⁷⁾ この話の原話からは、男にすっかり牛耳られて身動きのとれなかった女が、策略とごまかしによってなんとか自らを守ろうとした悲痛な状況が伝わってくる。女の安定とは結婚した男によってのみもたらされるものだったし、それ以外にほとんど可能性がなかった。そういう状況で糸紡ぎという仕事が女の苦しみと結びつけられたのあろう。しかしヴィルヘルムが結びの言葉をつけ加えたことによって話のニュアンスは一変してしまった。

第2のグループの話では、糸紡ぎがよくできる女は働き者で勤勉とされ、逆にできない女は怠け者で能力がなく役立たずとされている。KHM52『つぐみ髭の王様』“König Drosselbart”の気ぐらいが高い姫は、手が柔らかすぎて堅い糸で皮が向けてしまうので亜麻を紡ぐことができない。KHM156『糸くず』“Die Schlickerlinge”の花婿は、器量はいいがものぐさで糸を紡がせてもすぐ嫌になって放り出してしまふ花嫁を捨てて、花嫁の放り出した亜麻のかたまりをきれいに紡いで、それで立派な服を作る働き者の女中と結婚してしまう。またKHM188『錘と杼と針』“Spindel, Weberschiffchen und Nadel”では、孤児の少女がタイトルの三つの道具と一軒の家を形見としてもらい、勤勉の模範のごとくせっせと働き、そのおかげで王子に見せめられ結婚する。家事能力に秀でることによって一番貧しい娘が選ばれた者となり王子を射止める、というシンデレラ物語の一つで、糸紡ぎがいわばその仲介役をする。

糸紡ぎの出来不出来が女の登場人物の評価をはっきり二分する典型的な話にKHM24『ホレおばさん』“Frau Holle”がある。意地悪い継母をもつ働き者の美しい娘は、指に血がにじむほど糸を紡がされるが、紡ぎ手の守護神といわれるホレおばさんに、働いた報酬として金の雨を降らせてもらうことで最後には報われる。一方醜くて怠け者の腹違いの妹は、糸紡ぎをやり過ぎて指の皮がむけたように見せかけるが、実際はいばらの垣根に手を突っ込んだだけで、ホレおばさんをだまそうとする。そして働きの者の姉と同じように褒美をもらおうとするが、それがばれて大釜いっぱいピッチをぶちまけられる。KHM13『森の中の三人の小人』“Die drei Männlein im Walde”も同じモチーフの糸紡ぎ話で、無欲で勤勉で素直な性格が女としての美德に結びつけられている。これらのどの物語においても、怠惰と虚栄心は極めて重大な欠陥であり、慎み深さと仕事への精進は卓越性の証しとなっていることがわかる。

第3のグループでよく知られている話にKHM50『いばら姫』“Dornröschen”がある。この話は様々な形でヨーロッパから近東諸国に分布している類話があるが、そこではいずれも糸紡ぎとか針仕事といった典型的な女の仕事が不可欠の構成要素となっている。グリム兄弟がこの話の下敷きに採用したのはシャルル・ペローの『眠れる森の美女』である。他にも古代北欧伝説の『セームンドのエッグ』、イタリアではバジレーの『ペントローネ』などの有名な類話がある。特に後者には眠る母親の指から乳飲み子が亜麻糸を吸い取るという美しい描写がある。⁸⁾ここでは糸紡ぎと女の〈産みの力=生みの力〉との結びつきが強調されている。このおとぎ話の原型はすでに14世紀フランスの散文物語『ペルスフォーレ』に見られる。⁹⁾ いずれにしてもここでは糸紡ぎは肯定も否定もされず、話が新たな展開を見せる際の推進力あるいは蝶つがいのような役割を果たしている。

KHM55『ルンペルシュティルツヒェン』“Rumpelstilzchen”においても糸紡ぎが物語の展開に重要な意味を持つ。この話が『グリム童話集』決定版（1857年）の形に落ち着くまでに、複数の伝承を組み合わせるといふ過程をたどったと思われる。なぜなら、KHN14『糸を紡ぐ三人の女』との関連でも言えることだが、この話の起源には妖精や小人が糸を紡いだり布を織ったりするというゲルマン民族の古い言い伝えが確かにある。しかしまったく別の、他の話にもよく出てくる伝承の要素、すなわち何かと引き換えに援助や富を受けるといふ話型もまた組み込まれているからである。例えば引き換えに差し出すものは、KHM12『ラプンツェル』“Rapunzel”とKHM181『池の中の水の精』“Die Nixe im Teich”では同じく生まれたばかりの子ども、KHM31『手なし娘』“Das Mädchen ohne Hände”では夫や父親が家に帰ったとき最初に迎える者だったりする。ただ『ルンペルシュティルツヒェン』の決定版における題名と同じ名前の小人は、単に援助者であるだけでなく、一見敵対者のようにも見える。父親の愚かな見栄のため娘は強欲な王の手中に陥り、部屋いっぱいの藁を金の糸に紡ぐことができなければ殺すと脅迫される。助かる道は唯一つ、その作業を代わりにやってくれる小人に最初の子どもの身を渡すと約束することであった。つまりこの小人は、一方で娘に援助の約束をしながら、もう一方では娘の人生の道筋に介入し彼女をとんでもない危機に追い込むのである。ただしこの話も〈エーレンベルク手稿〉のもの比べると、話の筋の展開上極めて重要な部分に変更が加えられていることがわかる。一見「不可解」で「矛盾」に満ちたこの話については、次章でその起源とヴィルヘルム・グリムの改作の動機、さらにその歴史的社会的背景に的をしばって詳細に検討したい。なお名前当てというモチーフは、名前を知られると相手の思いのままになってしまうという古代人の迷信がもとになっていると言われている。

最後の第4グループの話においては糸紡ぎがはっきりと象徴的な位置を占めている。話の中の女や娘にとって、それは、彼女たちにふさわしい仕事であることを表したり、また囚われの女や貧しさにあえぐ女の辛い労働になったりする。KHM65『千まい皮』“Allerleirauh”では糸巻き車と糸巻きが隷属的な立場に置かれた女の持ち物となり、KHM79『水の魔女』“Die Wassernixe”では女の子が罰として糸紡ぎをさせられる。またKHM180『イブのまぢまぢの子どもたち』“Die ungleichen Kinder Evas”では糸紡ぎは家庭の貧困にあえぐ妻の仕事として描かれ、KHM181『池の中の水の精』では妻が水の精によって囚われの身となった夫を救出するためにせせと糸を紡ぐ。第1のグループの『糸を紡ぐ三人の女』にしても、第2のグループの『ホレおばさん』や『つぐみの髭の王様』にしても、糸紡ぎは姿を醜くしたり手を傷つけたりする仕事として描写されている。

こうして見てくると、糸紡ぎというモチーフがこれほど頻繁に、それもかなり重要な意味をもって登場するということは、グリム兄弟が昔話の展開にとって糸紡ぎが極めて重要であると考えていたと言ってよい。それも1810年の〈エーレンベルク手稿〉と1812/15年の初版を見比べるとわかることだが、彼らは出版のために書き直す過程で、女の苦しみや困難を象徴するものとして、いくつかの話に原話にはなかった糸紡ぎというモチーフを付け加えた形跡がある。例えば『つぐみ髭の王様』では糸紡ぎを書き加えたため王女の苦しみは倍増したし、『水の魔女』では元々あった二つの難題に亜麻紡ぎを追加してより趣向をこらした。また糸紡ぎについての表向きのメッセージは富と幸福につながるとしているが、実際はどの話をとっても望ましくない作業というメッセージが伝わってくる。糸紡ぎ話は確かに二つのある意味で背反するメッセージを伝えている。筋の展開上では、それはおおむね辛い仕事ではあるが必ず報われる、というありきたりの教訓であるが、語彙や話の内容の点から見ると、これらの話は糸を紡ぐ女たちが幾世代にも渡って耐えてきた暮らしの過酷な実情を伝えていることがわかる。次にこの二つのメッセージを奇妙な形で結びつけたと思われる KHN55『ルンベルシュティルツヒェン』について考えてみよう。

3. KHM55『ルンベルシュティルツヒェン』における「背反」あるいは「矛盾」

これは一見不思議なあるいは不可解な物語である。あるところに貧しい粉ひきがいた。彼は見栄っぱりで、あるとき王様に、自分の娘は藁を紡いで黄金にする、と嘘を言う。そこで娘は王様のところへ連れて行かれ、部屋中の藁を紡いで黄金にせよ、さもなければ殺す、と言われる。娘が途方に暮れていると、魔力をもつ小人がやって来て彼女の仕事を引き受け、一回目は首飾りと引き換えに、二回目は指輪と引き換えに、藁を金の糸に紡いでくれる。三回目に王様は大量の藁を娘に与え、それをすべて黄金に変えたら自分の妻に迎えると約束する。やはり小人が助けてくれるが、今度は見返りに娘と王様の最初の子を要求する。一年後に子どもが生まれると、小人がやってきて約束を果たすように迫るが、娘＝妃が余りにも悲しむので、三日待つからその間に小人の名前を当てたら子どもは渡さなくてもよい、と言う。三日目に使者が、森の一軒屋でその小人が自分の名前は「ルンベルシュティルツヒェン」と叫んでいた、と彼女に知らせる。小人が来たとき彼女がその名前を言うと、小人は自分の身をまっ二つに引き裂いてしまう。以上が1857年の決定版のあらすじである。これはアールネ／トンプソンの民話類型によれば500番「援助者の名前」に属し、「1. 不可能な仕事 2. 援助者との契約 3. 援助者が打ち負かされる」となっ

いる。しかしこの類型の定義からしてすでに矛盾がある。¹⁰⁾ 一体この小人は単なる「援助者」か。生まれてくる子を要求するというの一種の脅迫ではないのか。いやそもそも粉屋の娘は援助されるに価する努力を何かしたのか。

グリム兄弟が『童話集』に付けた原註によると、この話も類話がヨーロッパ中に広く分布していることがわかる。例えばドイツのヘッセン地方に伝わるある話では、妃の使者ではなく、王様自身が狩りの途中で小人が自分の名前を言うのを聞いたことになっていたり、また小人の名前が「フレーダーフリッツ」というものもある。フランスではラブレの『ガルガンチュア物語』の中で、「ルンベルシュティルトあるいはポッパルト」という遊戯があったという指摘もある。さらにオーノワ夫人の『白い雌猫』にも類似した話が入っているし、レリティエ嬢の妖精物語『リクダン・リクドン』(1705年)、デンマークの名前当て伝説、『千夜一夜物語』の中のトゥーランドットの伝説なども類話に属する。¹¹⁾ その他にもエスピノーサ『スペイン民話集』の中の『悪魔の名前』、イギリス民話『トム・ティット・トット』、フランス民話『リカベル・リカボン』など数え上げると切りがないほどである。

ここでこの話がどのような過程を経て1857年のグリム『ルンベルシュティルトツヒェン』決定版にまでたどり着いたのかを検証しておきたい。なぜならその作業は、ヴィルヘルム・グリムが、『童話集』の他の多くの話と同様に、この話にも改作の手を加えていったドイツ19世紀前半という時代の社会・歴史的コンテクストが—特に糸紡ぎをめぐるそれが—どのような形でこの話に埋め込まれたかを知る上で、重要な意味をもつと考えられるからである。

まず『ルンベルシュティルトツヒェン』の出典に関していえば、ヘッセンの口承民話と、カッセルでの資料提供者ドルトヒェン・ヴィルト及びハッセンプフルーク家の口承を組み合わせたもので〈エーレンベルク手稿〉では42番、タイトルは『ルンベルシュテュンツヒェン』“Rumpelstünzchen”となっていたが、初版以降では55番となり、タイトルも決定版のものに変えられている。また1819年の第二版以降は、カッセルのリゼット・ヴィルトから伝えられた話によって結末部分が変えられた。¹²⁾ ここで変更以前のエーレンベルク版と改作の結果でき上がった決定版を具体的に比較してみよう。前者では父親はまったく登場せず、ある娘が亜麻を紡いだら亜麻の糸ではなく黄金の糸ばかり出てきて嘆く場面から物語は始まる。後者ではそれがガラリと変わり、貧しい粉屋が自分の娘が糞を紡いで黄金にすることができると嘘をついて自慢するところから始まっている。だからその後の話の展開は当然大きく違ってくる。つまり娘が苦境に陥ったのは、自分が亜麻紡ぎの仕事をちゃんとこなせないからであったのが、自分の娘が並外れた芸当ができるかのように見栄を張った父親のせいになってしまったのである。また前者では、娘の嘆きを聞いて小人がす

ぐに登場し、難儀から救うのと交換に王子との最初の子を要求し、娘はその条件をすんなり受け入れる。ところが後者では、粉屋の娘は王様に薬を紡いで黄金に変えるよう強要され、できなければ殺すと脅されて、その後小人が登場して彼との取り引きを受け入れる。さらに妃となった娘は小人の名前の謎を解くために、前者では女の召使いを森へ送り出すのに対し、後者では男の召使いを出す。そして結末部分も、前者では名前を暴かれた小人は料理用の玉じゃくしに乗って飛び去るのに対し、後者では腹立ちまぎれに我が身を引き裂いてしまう。

こうして見てくると、確かに娘が社会の求めるような糸紡ぎの仕事ができなくて苦境に立たされるという点を両方の版とも問題にしている。しかしその問題をどのような視点から描くかという点において、この二つの版は大きく異なっている。まずエーレンベルク版では物語の視点はあくまで一人の娘にある。紡ぎ手のその娘にとって大切なことは、亜麻を紡いで糸にすることであり、黄金にすることではない。つまり彼女の女としての価値は、本来の糸紡ぎの習熟度と勤勉さによって計られるのであり、黄金の糸を紡ぎ出したところでそれは何の役にも立たず、むしろ糸紡ぎの技術を修得できていないことや不器用さの皮肉な象徴になってしまう。だからやがて娘を連れに来た若い王子が、彼女の黄金の糸を紡ぎ出す技ゆえに彼女と結婚するとは一言も書かれていない。娘は、糸紡ぎ技術の修得がなければより良い夫を見つけより良い人生を送るという極めて現実的な願望がかなえられない、という苦境に立たされる。そこで援助者としての小人が登場する。小人は彼女をゆするのではなく、むしろ彼女と取り引きをする。そして小人が約束の子どもを受け取りに来たとき、娘の成長を確かめるかのように謎かけをもち出す。彼女がその試練を女の召使いの助けを借りて乗り越えたとき、小人は悪魔の裏切りを呪いながら姿を消す。以上がエーレンベルク版から読み取ることができるこの話の主旨である。

ところが決定版では紡ぎ手として登場する娘の存在感と自律性が希薄になり、糸紡ぎという伝統的な女の手仕事の価値そのものがほとんど消滅している。そもそもこの娘が本当に糸が紡げるのかすら不明である。娘の人生はもっぱら、見栄っ張りの父親、強圧的な態度に出る王様、助っ人役の男の召使い、ゆすり屋の小人など、すべて男の手に委ねられてしまっている。その上、糸紡ぎという作業の本来的な価値が問われるのではなく、それは薬を紡いで黄金にすることができるという点にのみ価値があるとされている。ここでは娘の存在価値は唯一子どもを産むことぐらいである、と言わんばかりで、若い女が糸紡ぎという仕事において、ある試練を克服し自律した大人の女に成長するという、いわば加入儀礼的なニュアンスはまったくない。

それではヴィルヘルム・グリムはなぜこの糸紡ぎ話をこのような方向へ改作したのだろうか。確かに彼の改作傾向一般として、当時のドイツ新興ブルジョワジーの価値観、特に家父長的な男

女の役割分担というような社会背景があるにしても、それだけでは片づけられないより重要な原因があると思われる。すなわち、グリム兄弟が原話を収集し自分たちの『童話集』を編集出版した時代と社会に、女の手仕事としての糸紡ぎ技術がもはや必要とされなくなり、従って女が糸紡ぎの生産現場から姿を消しつつある事態が生じていたのではないか、という点である。次にこの問題を、当時のヨーロッパの亜麻布生産をめぐる社会的歴史的背景を検討することによって論じてゆきたい。なぜなら KHM55『ルンペルシュティルツヒェン』の話の展開に「背反」あるいは「矛盾」をもたらしたものは、この問題と密接に関係するからである。

4. ヨーロッパ近代初期の糸紡ぎをめぐる社会・歴史的コンテクスト

ジェーン・シュナイダーの論文『ルンペルシュティルツキンの取引き—近代初期ヨーロッパにおける民俗と亜麻布生産の商業資本による強化増大』¹³⁾ は、この問題について次のような興味深い報告をしている。

ヨーロッパの織物産業の歴史において、綿布と亜麻布は常に互換的あるいは競合的な関係にあった。両者は、高級な絹や羊毛とは異なり、比較的生産コストが低く従って安価で、その上取り扱いや着用在が簡単で長もちし、製品の品揃えが豊富なこともあって、庶民にとっては身近な衣料であった。また市場と流通の点でも両者は似かよっていたが、生産過程は本質的に異っていた。まず熱帯植物である綿はヨーロッパでは栽培できないが、亜麻は広く栽培できた。この相違から、綿布産業においては蓄積された資本が大きな役割を果たし都市ギルトとの緊密なつながりをもつことになったのに対し、亜麻布産業のほとんどは資本集約が少ない農村地帯により多く見られた。従って綿布生産は最初に技術革新を迎え、18世紀には産業革命の先導役を担ったのに対し、亜麻布企業家はこうした技術革新に熱心では無く、近代初期になっても旧態依然の生産様式のままであった。¹⁴⁾

ここでヨーロッパと綿布との関わりの経緯を一瞥しておきたい。まず第一期は12～15世紀で、海運術と航海術の進歩に助けられたイタリア商人が、東地中海、シチリア、スペインなどから綿を輸入し、自国で製品にして輸出した時期で、綿布産業の実質的な成長期であった。第二期は16～18世紀で、イタリア綿布が激減した、いわば不安定期あるいは停滞期である。理由は、アルプスの北側の綿布業者が綿糸を輸入し、イタリア製衣類を模倣して生産し始めたため、イタリア市場が大きく圧迫されたからであった。なかでも豪商フッガーの資金供給で16世紀に隆盛を迎えた南ドイツのファスチアン織りは強い競争力を備えていた。さらに衰退のもう一つの大きな原因は、

オスマン・トルコ帝国が自国産業保護のため第一次製品の支配を強化したことによって、輸入原綿の価格が高騰したことであった。第三期は18世紀以降で、アメリカ大陸の綿生産プランテーション地帯での奴隷制導入、原料移動のための安価な輸送費、製造過程における大々的な技術革新などによって、ヨーロッパの綿布産業は新たな興隆期を迎えることになる。¹⁵⁾

前述したように亜麻布の歴史は綿布の歴史を補完するものであったから、綿布産業停滞期に当たる第二期の時代に亜麻布のブームがあったと考えられる。というのはこの時期、綿布産業は減退したにもかかわらず、織物全体の市場は縮小していなかったからである。16世末からの大西洋経済の開幕に続く需要の拡大で、ブルターニュから西インド諸島へ大量の亜麻布が輸出され始めたことなどもあって、亜麻布産業は市場で重要な役割を果たした。糸紡ぎをモチーフにした民話が盛んに語られたのはちょうどこの時期と重なる。¹⁶⁾

ところで当時の亜麻布産業振興者の意図には、重商主義的な経済政策の理念が大きく影響していた。その一つは、国家の保護を後盾に産業を振興することによって貧困問題を解決するという考え方で、そのためには国の人口の「質」と「量」を向上させなければならないというものがあった。好ましい人口の「質」の向上とは、財産はもたないが戦争で命を喜んで危険にさらすような「働く貧困者」を作り出すことであり、仕事は財産と同様に道徳的救いで、「働く貧困者」は救われるという価値観を浸透させることであった。この考え方は振興者の多くがプロテスタント文化を受け入れた人たちであったこととつながっている。また好ましい人口の「量」の向上は、国家の強さとは、所有する金銀鉱山からではなく、活動的な人口の密度から派生する、という考えに基いていた。それでは亜麻布産業の振興がなぜ人口を増加させるかと言えば、その理由として次の三点が挙げられる。第一に、亜麻の種の植え付けから仕上げの布の製造までを自らで組織する「原初産業的」生産に特化された地域に雇用を提供することによって、貧困窮乏者の植民地への移住をせき止めることができる。第二に、亜麻布産業地域に外からの移住者、特に熟練した職人を引きつけることができる。そして第三に、これが糸紡ぎ話との接点になるという意味で最も重要な点であるが、雇用の機会が男女の出会いと結婚の増加をとおして人口の増加を促すことができる、というものであった。¹⁷⁾

ここで亜麻布産業振興者たちの具体的な構想と戦略について触れておきたい。織物生産の行程で最も手間がかかるのは糸紡ぎであった。1人の織り手を仕事に就かせておくには8人の紡ぎ手を必要とした。そこで振興者は若い女性と子どもを最も約束された紡ぎ仕事の候補生として選抜した。この戦略は、女の紡ぎ手は成人男子の戦争へ向けての体力を保ち、また田舎の怠惰な雰囲気を一掃することができる、という重商主義の考え方からきていた。これは、農村地帯の権威構

造を通して紡ぎ手を動員するのではなく、親の管理を離れた自律した紡ぎ手を養成する施設を組織する方向に向かい、やがて紡ぎ学校や紡ぎを教える孤児院が設立され、紡ぎ女主人の大きなネットワークが形成される。そして、糸紡ぎ車の脇の女は最も卓越しているとみなされ、糸を紡ぐことは女の最も大きな名誉であると言われた。さらに糸紡ぎは女にとって最も上品な仕事で楽しく知的であるとされた。しかしなんとと言っても女の紡ぎ手たちに対する究極の動機づけは結婚であった。前述した糸紡ぎ教育のネットワークをとおして、やがて紡ぎ手の仲間集団として〈紡ぎ寄合〉“Spinnstube”が形成される。そこに集まった紡ぎ手仲間たちは骨の折れる反復作業の重荷をまぎらわすために娯楽と社交を取り入れた。そこでの娯楽と社交は求婚の遊びを含む田舎の若い男女の出逢いと密接に結びついていた。もちろん宗教改革者は〈紡ぎ寄合〉を誘惑と不誠実の巣窟と見なし、若者たちは親の目を離れて、過ぎるほどの自由を楽しんでいると非難したが、重商主義の擁護者はそうした社交の形態は経済上の功利性と生産性に結びつくと考えていた。実際、そこに集まってくる若い男たちは、単に恋愛遊びのためだけでなく、女の勤勉さと技術を高く評価した。つまり糸紡ぎの技術は結婚のチャンスを増やすのに貢献したし、より良い紡ぎ手はより良い結婚相手を見つけることができたのである。¹⁸⁾

実は無数の糸紡ぎをモチーフとするおとぎ話や民話が作られ、いくつものヴァージョンに作り変えられ、繰り返し語られ語り継がれたのは、この〈紡ぎ寄合〉においてであった。農村の若い女、特に結婚適齢期の女は、勤勉に亜麻を処理し紡ぐことが自分の値打ちを決める特性と見なされていたから、そこでは彼女たちがいかに糸紡ぎに精進して良き夫を獲得し出世するかに焦点を当てた多くの物語が生まれた。マリアンネ・ルンプフの研究によれば、こうした物語の素材として〈紡ぎ寄合〉で語られたいくつかの笑話 (Schwänke) のタイプがある。例えば、糸紡ぎが下手だったり紡ぎ方を知らなかったりする若い娘が笑い物にされる話、そんな娘が糸紡ぎがうまいと思わせるために年長の女の助けを借りたり奇跡を求めたりする話、糸紡ぎの下手な娘の親がそんな娘を恥じて、自分の娘は紡ぎの天才だというふりをして近所の人たちを欺す話などである。また紡ぎ手の話は、例えば悪魔とか上流階級の人間を欺したりする他の物語のモチーフと結びつくことがよくあった。こうした物語では、若い娘は逆境を乗り越え、知恵を働かせて悪魔を出し抜き、超人的な紡ぎ手のふりをしとおした末、出世したり王子と結婚できたりするのが常であった。¹⁹⁾

ただしここで見落としてはならないのは、太古の昔から神話や伝説にも登場した糸紡ぎという女の創造的・自律的行為が、この時代になって大きく変質した点である。次章で詳述するが、かつて糸紡ぎとは、女が自らの運命を選び取るのに不可欠な行為であり、自分自身を主体的に創造

し、自分と社会を結びつける糸を生み出すことであった。既述したように亜麻布産業の企業家たちは重商主義特有の人口論者の傾向をもっていた。彼らは、この産業の拡大が農村の結婚率を増加させ、人口を増やして国力を強化するのに役立つと主張した。つまり彼らは、糸紡ぎという女の生産・創造行為を自分たちの経済生産性のために取り込み、それを戦略として位置づけたのである。言い換えれば女の生みの力が男の資本の論理によって奪い取られたのである。そして、女の手から糸紡ぎという生産手段が最終的に奪われる事態にとどめをさしたのが、1767年のジェイムス・ハーグリーブスによる紡績機の発明であった。

KHM55『ルンペルシュティルツヒェン』という糸紡ぎ物語の「背反」あるいは「矛盾」とは、ヴィルヘルム・グリムが、糸紡ぎという伝統的な女の生産行為が変質する以前の価値観をもとに組み立てられていた原話に、変質以後の価値観を挿入したために生じたものに他ならない。その価値観の土台には、端的に言えば、重要なのは亜麻糸を紡ぎ出すという生産行為そのものではなく、その糸が黄金=金銭になること、つまり商品市場で交換価値を生むという近代特有の経済性優先の考え方がある。

さらにもう一つ付け加えると、シュナイダーも指摘するように、この時代になって小人や妖精に対する人間の側の見方が変化したことも、この話に影響を及ぼしている。かつてヨーロッパの農民は小人や妖精を人間にとって好ましい価値をもつものと考えていた。特に亜麻布の生産地域では紡ぎ手を活気づけるのは精霊の力であると信じられていた。ところがやがてこの考え方が微妙に変化してくる。つまり小人や妖精が悪魔や魔女と結びつけられるようになってきたのである。そしてこの変化を決定的にしたのが、16～17世紀のヨーロッパの農村地帯を引き裂いた魔女狩りであった。カトリック・プロテスタントを問わず教会が先頭に立って、自然的・野性的・非合理的と見なしたものを、キリスト教のいう悪魔や魔女と同化させるべく大々的に宣伝したのである。²⁰⁾ ルンペルシュティルツヒェンという小人の役割の両義性あるいは背反性はこうした歴史的背景と無関係ではない。

5. 糸紡ぎの象徴性そして糸紡ぎと口承昔話の同時的衰退に関して —むすびにかえて

有史以前から近代になって紡績機械が発明され資本の論理が導入されるまで、糸を紡ぎ機を織る仕事を女が取り仕切っていたことは歴史的事実である。様々な神話や伝説に女の自然的生産力を表わすものとして糸紡ぎが登場し、女が操る^{つむ}錘はあらゆる存在の根本条件を生み出すものとき

れ、古代社会では糸紡ぎは日常における基本的な生産様式であった。つまり社会が糸紡ぎという女の生産力に大いに依存していた。糸紡ぎと女がなぜこのように結びつくようになったかについて、ヨハン・ヤーコブ・バッハオーフェンは『古代墳墓象徴試論』²¹⁾において興味深い指摘をしている。バッハオーフェンは糸紡ぎという行為の象徴的意味を、神話や墳墓の図柄をもとに次のように分析する。

そもそも象徴というものがいかにして形成されるのか、という点に関してだが、個々の言葉が常に感覚的=自然的意味から始まり、段々と発展して初めて抽象的・比喩的に用いられるように、宗教においても個人はもとより人類の発展においても、物質や質料から心的なもの・精神的なものへという道筋をたどる。象徴もまたこれと同様で、まったく自然的=物質的な意味がその根底に備わっている。太古の人類はこれによって自分たちを取り巻く世界の自然観を保存するのが常であった。糸を紡ぎ布を織るという作業もまた自然の太母神によって繰り返される一つの象徴行為なのである。すなわち「糸紡ぎも機織も自然力による造化の営みの象徴である。偉大な自然の原母たちの営みは、そのまま素材に構成と均衡のとれた形と精緻さを与える巧みな織り仕事に例えられる。生き物はすべてでき上がった形で大地の母胎から生まれる。生き物は母が物質の暗き胎内で及びもつかぬ巧みさで作り上げた肉体という精緻な織物を授かる。」²²⁾ そこではとりわけ手が重視されるという。手は自然創造と物質たる母性に結びつけて考えられ、あらゆる巧みの在処としてそのまま素材を構成し、生命を吹き込み、美しい形をも与える。さらに興味深いのは、手は指に分かれて初めて仕事を最も完璧に成し遂げられるという指摘である。「オウイディウス『変身物語』におけるリュディアの乙女アラクネの器用な指は、蜘蛛に変身させられた後もその巧みな技を失うことはない。アラクネ [蜘蛛] は均整のとれた精緻な蜘蛛の巣を織りなして、自然の織物の美を表現することを止めない。」²³⁾ (ちなみにドイツ語の「蜘蛛」"Spinne" は「糸を紡ぐ」"spinnen" から派生している。)

こうしてバッハオーフェンは、糸紡ぎや編み細工や機織りを自然力による巧みな造形の営みの象徴として位置づけた上で、この仕事のもつ大地的創造活動とのもう一つの関係性に言及する。つまり二本の糸の交叉は力の二重性と世代交替に不可欠な男女の交わりを表わし、糸が交叉して見隠れする状態は自然生活の永遠に続く営みに即応したイメージを提示したものである。さらにこの自然的=エロスの意味の関連には宿命とか運命という観念が込められているとする。すなわち一切の大地の有機体を構成する織物には死の糸がいっしょに折り込まれ、この自然最高の掟であり物質的な生の宿命である死滅には、たとえ神々といえども服さざるをえないのである。そして最後にバッハオーフェンは次のように結論づける。「総じて世界も、とりわけ人間の生も

同じように大いなる運命の織物として描き出すことも、同じ観念に基づいている。つまりこれらの考え方はすべて一つの根本観念、糸を紡ぎ布を織る出産の女神たちというあの原初のまったく自然的な観念に発しているのである。」²⁴⁾

糸紡ぎという行為の象徴性が女の自然的な〈産みの力=生みの力〉に由来することが明らかになったが、実はこの行為は物語を話して聞かせるという行為ともつながっている。昔から糸の紡ぎ手と同様に物語の語り手もほとんどが女であった。(ドイツ語では子どもたちに物語を話して聞かせる女性のことを「お話おばさん」「Märchentante」というが、「お話おじさん」「Märchenonkel」はいないからそういう言葉もない。) 女たちは、家庭での夜なべ仕事にあるいは地域の〈紡ぎ寄合〉で糸を紡ぎながら、民話やおとぎ話を語り合い、それが世代から世代へと絶えることなく語り継がれていった。グリム兄弟が自分たちの『童話集』を作るとき大いに参考にした書承資料の一つ、シャルル・ペローの『過ぎし昔の物語ならびに教訓』(1697年)には「がちょうおばさんのお話」「Contes de ma mère l'oye」という副題がついている。この「がちょうおばさん」は、イギリスのジョン・ニューベリーの伝承童謡集『がちょうおばさんの歌』“Mother Goose's Melody”(1765年)によって「マザーグース」という英語名で有名になったが、この人物については、フランク王国カロリング朝期の伝説にしばしば登場し子どもたちに物語を語って聞かせるベルタ(Berta)というフランス王妃と深い関係があるとする説が有力である。この王妃の片足あるいは両足が異常に大きく、「足に水かきのある王妃」あるいは「がちょう足の王妃」と言われ、彼女は語り部であることはもちろんだが、糸紡ぎとも密接に関わっている。彼女の足の奇形の原因は糸車を足で踏みすぎたからだと言われている。この伝説は13~14世紀頃ドイツ・ヘッセン地方に伝えられ、神話上の糸紡ぎの守護女神「ベルヒタ」あるいは「ベルヒタ」と合体し、「ホルダ」あるいは「ホレおばさん」として昔話にも登場する。²⁵⁾『グリム童話集』ではKHM14『三人の糸紡ぎ女』に出てくる助っ人の老婆の一人—「片足がまるでうちわのようで、歩くとペチャリペチャリ音がした」—や、KHM24『ホレおばさん』で主人公の娘を助けるタイトルの名前の女性がそれに当たる。

しかし、近代初頭になると女の産み生む力を象徴する二つの行為〈紡ぎ〉と〈語り〉の価値が大きく変質する、と言うより正確には衰退する。ここに二枚の扉絵がある。一つは前記のペローの童話集に付けられたものである。見るからに農家の働き者おばさんという身なりの女性が腰かけている傍には糸紡ぎの^{つむ}錘が置いてある。そして彼女を取り囲むようにして三人の子どもたちが大きく目を見開いて彼女の話に聞き入っている。後の壁の飾り板には「がちょうおばさんのお話」と書かれている。²⁶⁾ もう一つの絵は19世紀に活躍した著名な童話画家ギュスターヴ・ドレの

作で、農民というよりは品のよい中産階級のおばさんといった感じの女性が椅子に腰かけ、やはり子どもたちが彼女を取り囲んでいるが、傍の錘は完全に消え、代わりに本が一冊彼女の膝の上の開けられている。²⁷⁾ この二つの扉絵の間には100年余りの歳月が流れたことになるが、その間に昔話と糸紡ぎをめぐる状況が決定的に変化したことを、それも両者はほぼ同時に変化したことを見て取ることができる。印刷製本技術が進歩し流通市場が確立し、その結果童話集が数多く出版され広く普及してくると、語りは書物にとって代われ、昔話は糸紡ぎ部屋から居間や子ども部屋へと場を移したのである。同じように、糸紡ぎが農家の仕事部屋や〈紡ぎ寄合〉で働く女の手から、重商主義のイデオロギーをまとった都市の商業資本家の手に移り、女の自然的な生産行為が市場での交換価値に変質した。同じ頃グリム兄弟は、いく人かの中産階級の女性から口承昔話を聞き取り、多くの書承の類話を収集し、膨大な資料を駆使して、あの記念碑的な童話集『子どもと家庭の昔話集』を完成させた。ここで記念碑的と言ったのは、この書物が、発刊から今日に至るまで200年近くもの間、世界の童話界の頂点に君臨してきたという意味よりも、むしろ何千年と続いたであろう口承昔話の伝統に決定的な終止符を打ったという意味においてである。しかしそれでも、『グリム童話集』に数多く収録された―多くはヴィルヘルム・グリムによって改作された―糸紡ぎ物語を丹念に注意深く読み込んでゆくと、時代とともに消えていった、かつてのヨーロッパの片田舎の紡ぎ部屋の女たちの、陽気な、ときにはうら悲しい語りを聞き取ることができるはずである。

[後記：本稿は拙論『グリム昔話論〔1〕－昔話の起源』（『近畿大学教養部紀要』第29巻第2号）の続編にあたるものである。]

[注]

- 1) “Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm” が原タイトル。以下引用の際は KHM と略す。本稿では次の版を使用する。Brüder Grimm : Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde. (Philipp Reclam, 1982)
- 2) G. Treusch-Dieter : Wie den Frauen der Faden aus der Hand genommen wurde. In : Ästhetik und Kommunikation, 1964. S.12.
- 3) Marianne Rumpf : Spinnstubenfrauen, Kinderschreckgestalten und Frau Perchta. In : Fabula 17, 1976. S.215.
- 4) Ruth Bottigheimer : Grimms Bad Girls and Bold Boys - The Moral and Social Vision of the Tales. (Yale University, 1987)
邦訳：鈴木晶他訳『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』（紀伊國屋書店、1990年）192-209頁。

- 5) 高木昌史『グリム童話を読む事典』(三交社, 2002年) 47頁。
- 6) Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe in der Urfassung. Hrsg. von Friedrich Panzer. (München, 1948)
邦訳: 吉原高志他訳『初版グリム童話集』全4巻。(白水社, 1997年) 第4巻, 74頁。
- 7) 注1) に同じ。Bd. 2, S.201.
- 8) グリム兄弟の原註。注1) に同じ。Bd. 3, S.97.
- 9) Johannes Bolte und Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 1. (Olms-Weidmann, 1994) S.434.
- 10) ジャック・ザイプスもその点を筆者とは若干異なった視点から論じている。
Jack Zipes: Fairy Tale as Myth, Myth as Fairy Tale. (Kentucky, 1994)
邦訳: 吉田純子他訳『おととき話が神話になるとき』(紀伊國屋書店, 1994年) 78-79頁。
- 11) 注1) に同じ。Bd. 3, S.106-108.
- 12) 注9) に同じ。S.490.
- 13) Jane Schneider: Rumpelstiltskin's Bargain - Folklore and the Merchant Capitalist Intensification of Linen Manufacture in Early Modern Europe. In: Cloth and Human Experience, eds. Annette B. Weimer and Jane Schneider. (Washington D.C., 1989)
邦訳: 佐野敏行訳『布と人間』(ドメス出版, 1995年)
- 14) 同上。邦訳, 270-271頁。
- 15) 同上。272-273頁。
- 16) 同上。273-274頁。
- 17) 同上。277-278頁。
- 18) 同上。285-291頁。
- 19) Marianne Rumpf: Spinnerinnen und Spinnen - Märchendeutungen aus kulturhistorischer Sicht. In: Die Frau im Märchen. Hrsg. von Sigrid Früh und Reiner Wehse. (Kassel, 1985) S.65-66.
- 20) 注13) に同じ。293-295頁。
- 21) Johann Jacob Bachofen: Versuch über die Gräbersymbolik der Alten. (Basel, 1859)
邦訳: 平田公夫他訳『古代墳墓象徴試論』(作品社, 2004年)
- 22) 同上。邦訳, 435頁。
- 23) 同上。436頁。
- 24) 同上。438-439頁。
- 25) Marianne Rumpf "Berta". In: Enzyklopädie des Märchens. (Walter de Gruyter, 1979) S.155-162.
- 26) Maria Tatar: The Hard Facts of the Grimm's Fairy Tales. (Princeton, 1987)
邦訳: 鈴木晶他訳『グリム童話—その隠されたメッセージ』(新曜社, 1992年) 180頁。
- 27) 同上。邦訳, 184頁。